

研究課題名	放射線治療後の脳の二次性変化に関する疫学研究
研究責任者名	広島大学病院脳神経外科 診療准教授 山崎 文之
研究期間	2019年9月5日(倫理委員会承認後)～ 2024年 3月 31日
対象者	過去に頭部に放射線照射を受けられたことがある患者さんで、広島大学病院 脳神経外科にて2000年1月から2020年12月に経過観察が行われた患者
意義・目的	<p>悪性脳腫瘍の治療の進歩に伴い、悪性脳腫瘍が寛解、治癒した状態で長期に生存することが可能になってきています。このような患者さんを「がんサバイバー」と呼びますが、がんサバイバーの問題として、長期間経過した後の治療に伴う健康上の問題、すなわち晩期障害（晩期合併症ともいいます）が小児がんの領域では注目されています。しかし、「成人」のがんでは長期生存が難しいため、晩期障害についてはあまり注目されてきませんでした。一方、近年のがん治療の進歩により、成人のがんでも長期生存が可能となってきました。</p> <p>悪性脳腫瘍の患者さんは、治療として放射線照射が必要になることがあります。そして、病気が治癒して長期間を経過すると、放射線照射と関連して脳の中に二次性の変化や二次がんが発見されることが晩期障害の代表例として報告されています。本研究では、悪性脳腫瘍に対する放射線照射後の脳の二次性変化のうち、海綿状血管腫、白質脳症、白質壊死、二次性腫瘍（二次がん）、脳梗塞の発生に着目しました。小児と成人のがんサバイバーにおけるこれらの発生頻度を明らかにすることで、今後の治療の指標とするとともに、がんサバイバーのフォローアップとケアに役立てることを本研究の目的とします。</p>
方法	過去に脳または脳・脊髄に放射線治療を受けた患者さんで、2000年から2020年に当院にて経過観察のため受診した人を対象として、後ろ向き研究としてカルテ記述を検討します。経過観察期間中に海綿状血管腫、白質脳症、白質壊死、二次性腫瘍（二次がん）、脳梗塞が発生しているかどうかについて検討します。放射線の照射方法、照射部位、照射線量と晩期障害が発生するまでの期間を統計学的に解析します。データは全て診療録（カルテ）情報を転記して行います。（個人が特定出来る情報は転記しません）
共同研究機関	なし
試料・情報の管理責任者	広島大学 大学院医系科学研究科脳神経外科学 診療准教授 山崎 文之
個人情報の保護について	<p>調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。</p> <p>研究に資料を提供したくない場合はお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。</p>
問合せ・苦情等の窓口	

研究機関：広島大学

E-1741-1

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3

T e l : 082-257-5481

広島大学病院脳神経外科 診療准教授 山崎 文之